慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	朝鮮に於ける我商業の前途
Sub Title	
Author	星野, 勉三
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.2 (1911. 2) ,p.151(33)- 161(43)
JaLC DOI	10.14991/001.19110215-0033
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110215-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たのもある、貞應三年版の佛母大孔雀明王經の如く、奥書に「願主權僧正法師大和尚位覺敎、經生阿闍梨大法師禪海、彫手大法師實永」といふ風に、開版人版下の筆者及彫工の名を連記せるは稀有の例で、又實永頃の活字本に、植工某と活字を植ゑた人の名のあるのも珍しい、德川時代になつて、書林の出版物には發兌人の名を擧ぐるを例とし、後には江戸京都大阪三府の書林の名を連記してあるが、之は其中の或者が出版人で、他は取次人の意味でもあらうし、又實際大部のものになると、數人合資で版木を作り、銘々若干枚を所有し、印刷の場合に其版木の數に應じて相當の板賃を收めたといふ事である。

淮海外集　二卷

通川花路分助鏞刊行

時寶永七庚寅下秋　植工常信

朝鮮に於ける我商業の前途

星野勉　三

朝鮮に於ける我商業は未だ農業の如く重要なる地位を占むるに至らずと雖も、其研究は頗る興味ある事にして、或は其之に從事する者の中に不正の輩多きが爲めに其の前途を悲觀する者あり、又は我商業は所謂共食（トモグヒ）に過ぎずとて其反省を促す者ある等の事情を顧れば、朝鮮に於ける我商業の前途に就て一言するは亦徒勞に非ざる可きを信ずるなり。

抑も朝鮮に於ける我商人の貿易上の勢力如何と云ふと、之は戰後順調に發達し來たりて未だ特に辯明を要するが如き問題あるを見ず、然れども今議論の順序として其大勢を略說せんに、其輸出入共に我商人の獨占と云ふも過言に非ざるの形勢にして、統監府發行の韓國施政年報等に依りて最近十年間の計算を見るに實に左の如き喜ぶ可き現象を呈しつゝあるなり。

年次	日本へ輸出	日本より輸入	同上合計	輸出總額に對する割合	輸入總額に對する割合	輸出入總額に對する割合
明治卅三年	七、二三二、四一六円	八二四、二九六円	一、五四七、三、七一二円	七、七	七、六	七、五
明治卅四年	七、四〇二、一一六	九、〇五一、八八一	一、六、四五三、九九七	八、七	六、二	七、一
明治卅五年	六、五四九、六四六	八、六八九、三二〇	一五、二三八、八六六	七、九	六、四	六、九
明治卅六年	七、五九六、六二四	一一、五四四、九六九	一九、一五一、五九三	八、〇	六、三	六、九
明治卅七年	五、六九七、三七一	一九、〇〇七、二八七	二四、七〇四、六五八	八、二	七、一	七、三
明治卅八年	五、三八九、九一四	二三、五六一、八九九	二八、九五一、八一三	七、八	七、三	七、四
明治卅九年	六、九一六、八四八	二二、九一四、一五四	二九、八三一、〇〇二	八、五	七、七	七、九
明治四十年	一二、六四九、二六七	二七、三六三、八七二	三九、九〇九、三九五	七、六	六、六	七、一
明治四十一年	一〇、九六三、三五三	三四、〇四〇、四六五	三五、〇〇三、八一八	七、七	五、八	六、三
明治四十二年	一二、一五八、八八五	二一、八一四、〇九一	三三、九七二、九七六	七、四	五、七	六、四

右の表に依りて我國が金額に於て頗る優勢なる事は之を知り得たりとして、只多少注目に價す可きものは四十二年度に於て日本よりの輸入金額大に減少し且つ四十一、四十二の兩年度に於ては輸出入總額に對する我割合頓に減少したる事にして、或は清、英等の商人に依りて蠶食されたるに非ずやとの疑を生ず可しと雖も、之れ一は戰後鐵道の建設官廳の建築等の爲めに切りに材料を輸入したるに、最早事業も完成に近づきければ此の方面の輸入の減じたると、他は統計編成の方法の變更より來たるものにして、從來何國より輸入すると又何國へ輸出するとを問はず、日本を經由するものは日本の輸出入となしたるに、此の如き方法を採りては各國輸出入の實數を知る事能はざるが故に、四十年以來之れを改めて其各國實際の輸出入額を計上する事となせしかば、內地の諸港を經由して輸出入されたる分は除かるゝの結果となりて此の如き數字上の減少を來たしたるものなれば、決して我貿易の退歩を意味する譯にはあらざるなり。

然らば我國以外の各國は朝鮮貿易に於て如何なる地位を占めつゝありや、又我に比して幾何の勢力を有するやと云ふに表を以て四十二年の分を示せば左の如し。

	輸出	輸入	合計	輸出に對する千分比例	輸入に對する千分比例	合計に對する千分比例
日本	一二、〇八一、七三八円	二一、八五二、二四五円	三三、九三三、九八三円	七四四	五九六	六四一
支那	三、二〇三、四六一	四、四七三、二〇九	七、六七六、六七〇	一九七	一二二	一四五
英國	五〇、一二六	六、四七八、二二四	六、五二八、三五〇	三	一七七	一二四
米國	六八、九七八	二、三九六、九七五	二、四六五、九五三	四	六六	四七
獨逸	一四六、一二六	五一二、六七八	五四九、一八三	二	一四	一〇
露領亞細亞	七八四、五二八	四四、四〇四	八二八、九三二	四八	一	一六

之に依りて觀れば朝鮮貿易に於て我國は殆んど獨占的の地位を有するは明ら

かなりとして、之に次ぐものは支那と英國なれども其他の諸國は殆んど採るに足らざるなり、而して支那及び英國は何を貿易し我國との競爭は如何に成り行く可きやと云ふに、先づ支那に就て見んか先月漸く公にされたる朝鮮總督府發行の財務統計年報に依れば四十二年に於て支那より來たれる重要商品は

總計	四、四七三、二〇九圓の内
絹布	一、一五二、六八八圓
麻布	一、五一三、八五五圓
紙卷煙草	二二九、五七五圓
石炭	二七七、五三五圓
木材及板	二四三、二〇三圓

此外に萬位に達する物殆んどなし。

又朝鮮より支那へ輸出せる重要商品は

總計	三、二〇三、四六一圓の内
米	一、一五五、八九五圓
紅蔘	八四二、一七二圓
大豆	一八八、八八八圓
牛皮	一四六、二一八圓
木材及板	一二六、〇三八圓

此外十萬位に達するものなし

扨て鮮支兩國の貿易に於ける重要商品は右の如くにして、其最も金額の多きものは絹布、麻布、米、紅蔘の四種なれども絹、麻輸出の前途の如きは必ずしも樂觀す可きものにあらず、其支那絹の如きは價の安きが爲めに支那商人の手を經て盛んに朝鮮へ輸出せられたれども、現今に至りては日本商人が此方面に蠶食して支那絹の輸入を取扱ふ場合もあり又朝鮮人側に於ては舊宮内府の補助を得て支那製絹織物同樣の物品の生産を試つみゝある例もあるなり、又支那の如き原料國が米を輸入し或は人蔘を輸入したりとて强ち其生産力を增す所以にもあらざる可し、此の如くなれば支那の貿易は到底我れに比す可くもあらず、且つ將來强敵とするにも足らざるは明らかなり、而して之に次ぐ英國の重要輸出入品は如何と云ふに、

朝鮮への輸入　六、四七八、二二四圓の内

晒金巾	一、四七七、三三一圓
生金巾	一、一三〇、三八〇圓
シーチング	六一六、八〇七圓
綿繻子及綿イタリヤンス	四二九、〇七〇圓
鐵筒及管	四六一、一四三圓

此外十萬圓臺に達するもの殆んどなし。

朝鮮よりの輸出は五、〇、一二六圓にして重要商品なし。

此の表に依りて見れば英國の重要商品は金巾のみにして、此の外に將來盛んに輸出入さる可き物とては見當らず、然るに近來我紡績業の發達と共に我商品の盛んに輸入せらるゝを見れば、此方面に於ける英國の優勢は必ずしも永遠に繼續する譯にもあらざる可し、此の如く觀じ來たれば朝鮮の輸出入中我は實に六割四分強を占むる優勢の地位を有し、且つ他國の貿易を蠶食こそすれ、未だ孰れの國よりも侵略せらるゝの恐れなき頗る安泰の地位にある事は明らかなる可し。

以上我朝鮮貿易の樂觀す可き事を述べたれども、轉て朝鮮内地に於ける我小賣商人の前途如何と云ふに、此點に關しては屢々悲觀說を爲す者あるが故に其當否を檢するは頗る興味ある業なる可し、扨て我小賣商人と支那人又は朝鮮人とは孰れが便宜の地位に在るやと云ふに、支那人、朝鮮人の如きは多く自から土地家屋を所有するが故に泥峴の日本商人の如く小商店に對して百圓に近き家賃を支拂ふを要せず、且つ食物、衣服の如きも頗る安價にして日本人が故らに多額の金錢を投じて日本商品を消費するに比すれば其生活甚だ容易にして、且つ彼等は教育、衛生、土木等の設備をなさゞるが故に公費の負擔は甚だ輕く以て其營業の甚だ少なき利あり、加之ならず日本商人中には所謂無賴の食ひ詰め者少なからず、客人に對する事頗る無禮にして其感情を害する事屢々なれども、支那人、朝鮮人には殆んど此の如き事あるを聞かず、故に朝鮮人の如きは内地人より品物を買ふを欲せず其所要の物品は之を支鮮商人より購求するは勿論、日本製の物品をも尚日本商人よりは買はで支鮮小賣商人の手を經て買入るゝの有樣なり、左りとて日本の小賣商人中必ずしも朝鮮人を相手として營業する者なきに非ず、然れども其數は極めて僅

かにして、先づ瀬戸物屋、金物屋、駄菓子屋の類に過ぎざるが故に朝鮮相手の我小賣商業は殆んど之なしと云ふも可なり、而して其他の小賣商人に至りては皆内地人を相手としつゝあるものなれば、茲に悲觀説を生じて我商業は只所謂共食を行ひつゝあるものにして、朝鮮に發展したりとて朝鮮人と利益の交換を行ふに非ざるが故に全く無益なりとの説をなす者あるに至り、然れども我輩は全然此の如き結論に賛成する事能はず、夫れ日本國の小賣商人が朝鮮の消費者に賣込むに勉めずと云ふは事實なれども、數種の雜貨又は織物類の外は鮮人が數百年間の經驗に依りて得たる熟練を以て製造販賣するものなれば、到底我商人の競爭し得可きものにあらず、又彼れと我れとは嗜味の相違あるが故に、我が如何に彼の物品を摸倣したりとて充分に彼等の滿足を買ふに足るものにあらず、故に我小賣商人が之より以上に朝鮮人に對して發展するは頗る困難なるなり。

扨て以上述べたる如く我小賣商人が朝鮮人に供給する多寡は甚だ多からずといはゞ其の消費者の同胞なる朝鮮商人に劣る事なれば敢て不思議ならざれども、其外國人なる支那人に劣るに至りては甚だ憂ふ可き事なりとの説を爲す者あり、

然れども余輩は此の如き説も亦之を是認する事能はざるなり、卽はち朝鮮人は消費者として頗る購賣力の少なきものにして、彼等は將來大に其財産を增加して多額の購入を行ふの見込もなく、又人口を增加して購買額を多からしむるの見込もなき者なるが故に、此の如き得意のみに對して賣込を行ふ支那商人の前途の如きは決して羨む可きものにあらざるなり、されば余の京城に在るの日親しく清國總領事館を訪問して此點に關する館員の意見を求めたるに、彼も全然余と同樣の見解を漏らしたり、而して余は更らに清國は如何なる手段を以て此形勢を回復せんとするやと問ひたるに、未だ確たる意見なければ先づ成行に任ずるより外なしとの答を得たり。

此の如く我は購買力の增加せざる否寧ろ減せんとする朝鮮人に對してこそ小賣を行はざれども、實は其輸出入を獨占し我産物を輸出して朝鮮又は支那の小商人をして販賣せしむるものなれば、商業上に於ける我地位の如きは決して憂ふ可きものにあらざるなり、然るに又我商業を悲觀する者は説を爲して曰はく、我小賣商人は日本町に割據して日本人の需要を滿たすを以て滿足する者の如くなれど

も、此の如くんば一日本人の得たる所は卽ち他の日本人の失ふ所……所謂共食にして何の得る所もなきものなりと、此說の如きは支那朝鮮に於ける我商人を攻擊する流行語にして一見恰も眞理なるが如しと雖も、仔細に觀察するに於ては其甚だ過れる事を發見するに難からず、卽ち內地人が渡鮮する何故也やと云はゞ其只一の動機は內地に於けるよりはヨリ多くの利益を得んとするにあるなり、卽ち農業の方面ヨリ云へば內地に於ては收穫漸減の法則行はれて利益を得る事困難なるが故に此の如き事情の存せざる朝鮮に渡たりて土地を耕やし、以て內地に於けるよりはヨリ多くの生產を行ひてヨリ大なる利益を得んとし、又勞働者の如きも同樣にして、內地にては其供給夥多にして職業を得るに困難なるが故に、其需要の多き所、換言すれば限界的實利の最も多き所に於て就業し、以て內地に於けるよりはヨリ多くの生產を行ひて、ヨリ多くの賃銀を得んとするなり、而して以上述べたる人々が生產に從事するには衣食住の消費を行はざる可からず、然るに我小賣商人は之を供給して以て同胞のヨリ多く生產する事を助くるものなれば頗る有用なる仕事を行ひつゝあるものにして、或は之を以て共食と稱し得可きも、此の如き共食は甚だ歡迎す可きものなりと云ふ可し、尙經濟史家の如きは經濟發達の時期を分けて個人經濟時代、都市經濟時代、國民經濟時代、世界經濟時代等となし、各人獨立して共食をなさゞりし時代を個人經濟時代と稱し、最も幼稚なるものを認め、世界擧りて共食を行ふ時代を世界經濟時代と稱し、最も進步せるものと認むるものなり、されば共食の發達は經濟の發達を意味するものにして、朝鮮に於ける我內地人の共食は實に內地に於けるよりはヨリ多くの生產を行ふ義にして、又此共食を行ふは內地の產物を消費して其の輸入を促がし以て內地に在る生產者に迄利益を與ふる所以なれば、余輩は此の誤解されたる共食經濟の益〻發達せん事を希望するものなり。